



0-22-05-06

お薬手帳(2)

地域医療連携における電子お薬手帳の可能性

○山浦 知之¹⁾、飯島 伴典¹⁾、山浦 克典²⁾、岡崎 光洋³⁾、
野本 禎⁴⁾、飯島 康典¹⁾

¹⁾一般社団法人上田薬剤師会、

²⁾千葉大学大学院薬学研究院、³⁾北海道薬科大学、

⁴⁾東日本メディコム(株)

【目的】お薬手帳は、患者が服用する薬剤に関する情報提供ツールとして一部の医療機関や薬局で始められた。患者への情報提供の推進を目的として、2000年4月の診療報酬改定で評価され、現在に至っている。しかし全国におけるお薬手帳の普及率は平成22年において約55%程度であり、さらに来局時に必ず持参している患者さんは30%程度という報告もある。お薬手帳を所持する意義を患者に理解いただくと共に、常に携帯できるようなものにする必要があると考えられる。2010年5月に政府のIT戦略本部が発表した医療IT戦略の一つとして「どこでもMY病院」構想が発表された。本構想は、「国民一人一人が自らの健康医療情報を電子的に管理し、これを医療・介護・健康関連サービス事業者に提示して、どの病院に行っても、かかりつけ医に準じた診療を受けられる環境の構築を目指す」ものである。そこで、本研究では、常に個人が携帯している携帯電話に着目し、スマートフォン(以下、スマホ)を用いた、電子お薬手帳アプリを用いて、お薬手帳の電子化の可能性及び運用に関する調査を行った結果を報告する。

【方法】(社)上田薬剤師会を実施主体とし、東日本メディコム(株)、(株)メディエイド、KDDI(株)各社の研究支援のもと実施する。「電子版お薬手帳データフォーマット仕様書 Ver.1.0」(保健医療福祉システム工業会)に基づいてQRコードが印刷される調剤報酬明細書及び、NFC端末を用いて、薬局店頭においてお薬手帳アプリの利用説明及び、アンケート調査を行った調査の結果を報告する。

【キーワード】スマートフォン、お薬手帳、電子版お薬手帳、電子薬歴、NFC

一般演題

口頭発表(9月22日)